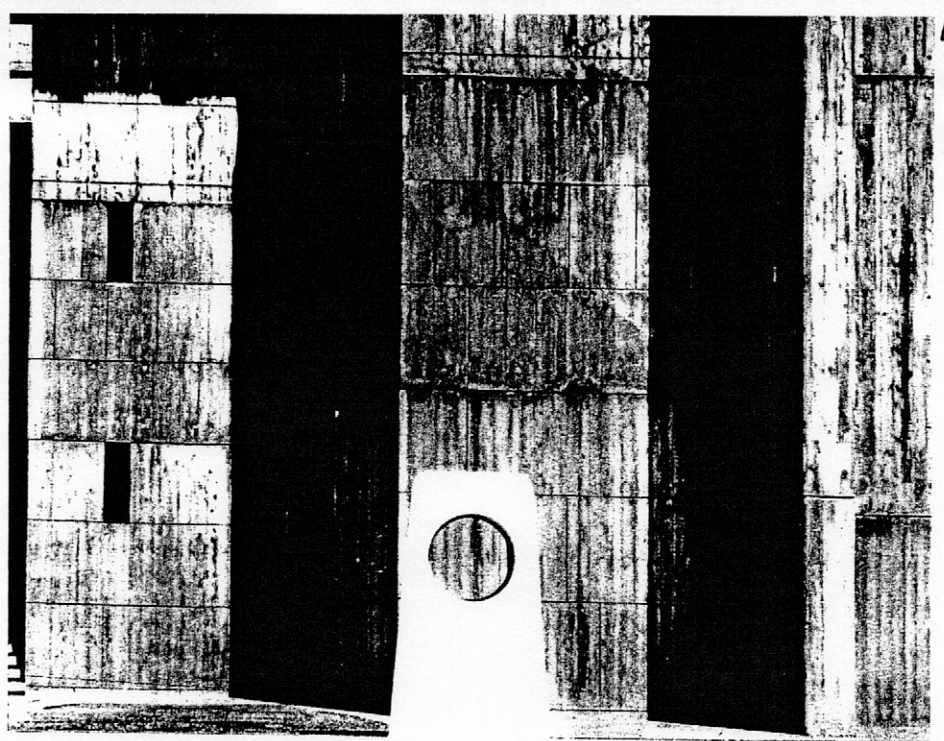


1960年8月

新建築

8月号



九州工大記念講堂 東工大清家研究室 8-2
九州工大記念講堂をみて 浜口隆一 8-9
名古屋大学豊田講堂 槇文彦 8-21
名古屋大学豊田講堂をみて 大高正人 8-31
尾道市庁舎 京大增田研究室 8-34
外務省庁舎 小坂秀雄 8-40
霞ヶ関中央官衙計画について 横山正彦・館野博信・笹倉徹 8-47
太陽の広場 早大武研究室 8-50
恵泉幼稚園 田中正美・小川信子 8-54
子供の遊び場 樋口清・南迫哲也 8-61
コンクリート切妻屋根の家 柳下洋一 8-65
成城の家 佐藤正己 8-72

計 画 案

桐朋学園計画案 生田勉・広部達也・原広司 8-79
J学園総合計画案 NOUS設計同人 8-81
技術の手帳：照明計画(V) 小木曾定彰 8-83
時評：近代建築家は見当違いをしているのではないか 樋口清和付 8-53
ホワイエ：「ルドルフと語る」を読んで 天野太郎・植田一豊 8-88
海外雑誌より・詳細図譜・書評・編集後記・資料時価表

表紙撮影 恒成一別

新 建 築 © 第35巻第8号
定価 200円 送料 24円
国内1カ年 2500円 (特大号送料共)
国外1カ年 \$10 (特大号送料共)
昭和22年6月5日第3種郵便物認可運輸省承認雑誌第242号

1960年8月1日 発行 毎月1回1日発行
編集兼発行人 吉岡保五郎
発行所 株式会社 新建築社 東京都中央区宝町1-6
電話京橋 (561)4306・4752・振替東京 30653
印刷所 大日本印刷株式会社

大 取 次 東 販 ・ 日 販 ・ 中 央 社
大 阪 屋 ・ 誠 光 堂 ・ 栗 田 雑 誌
告 告 一 手 扱 い 株 式 会 社 建 報 社 東 京 都 中 央 区 宝 町 1-6
電 話 京 橋 (561) 2567・3639

尾道市庁舎

広島・尾道

設計監理 財団法人建築研究会
担当 京大増田研究室
施工 株式会社大林組広島支部

尾道は古くから瀬戸内路の東西交通の要地として栄えた。室町時代にもさかのぼれる古寺が、いまなお点在するのはこのような地方都市には珍しい。さいわい戦災もまぬがれ、街はかつての文化の香りをとどめている。本瓦葺きの塹並や白壁の土造の街なみは時間のふるいにかけられた美しさを控え目にしめしている。

われわれは尾道市庁舎の建築において、現代のわれわれがとらえるべき真の建築にいくらかでも近づこうとした。一つのモチーフや一つの素材のくり返しが、やがて真の造形と呼びえるものに凝縮される。それは時間を超えて、みるものに働きかけてくる。この建築にはモチーフや素材の目新しさはない。すでに一応手慣れたものの中での追求である。しかし、より大きな意図は空間と造形との中に建築をとらえようとするにある。それは日本と西洋との建築伝統への反省と、これらをしっかり踏まえた新しい両者の融合への意欲ともいえよう。日本建築の中にみられる情緒に溺れることなく、西洋建築の伝統を形づくる秩序の精神を評価する。

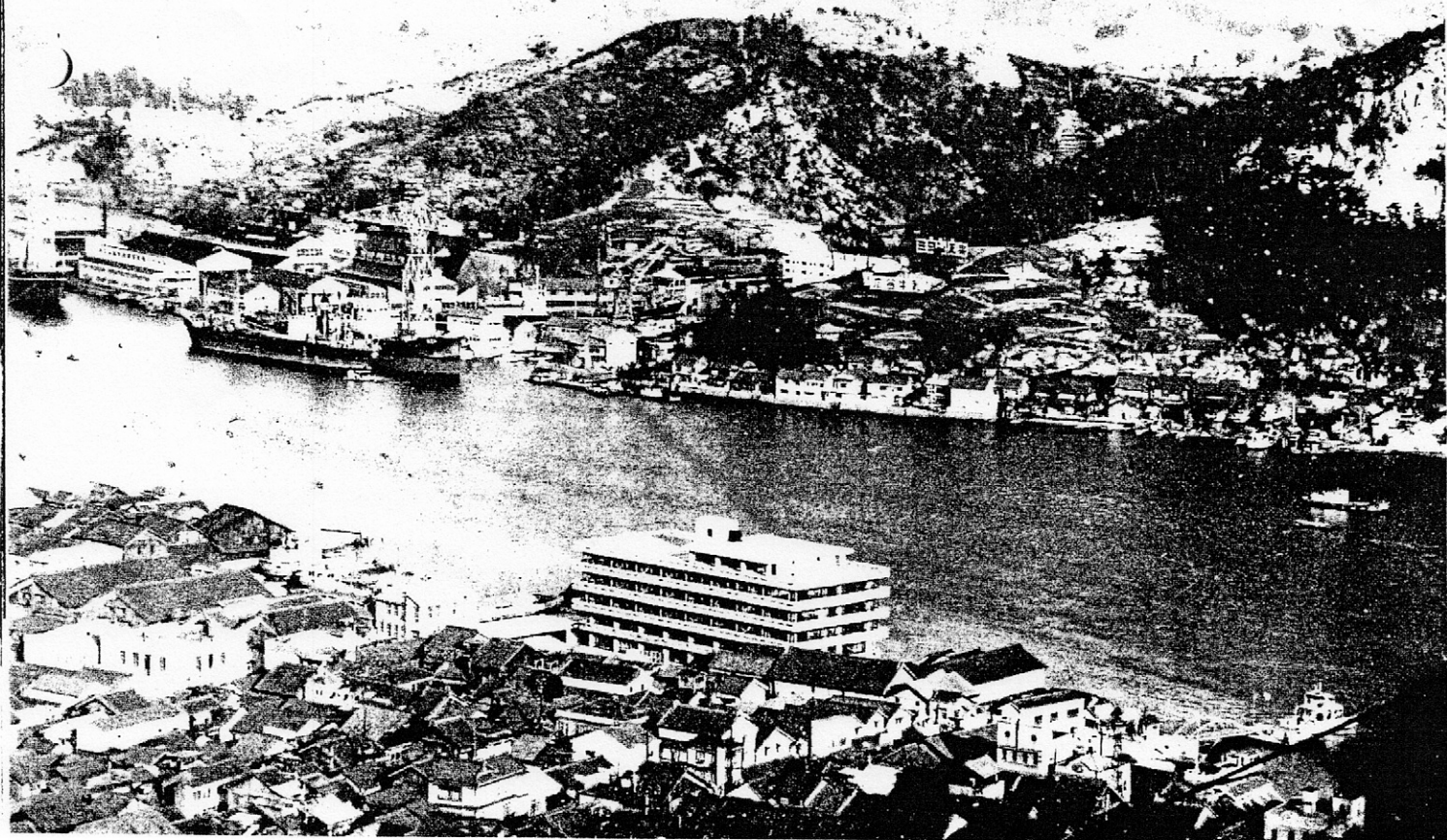
この設計に際して一つのモジュールを導入した。それがいかなるモデ

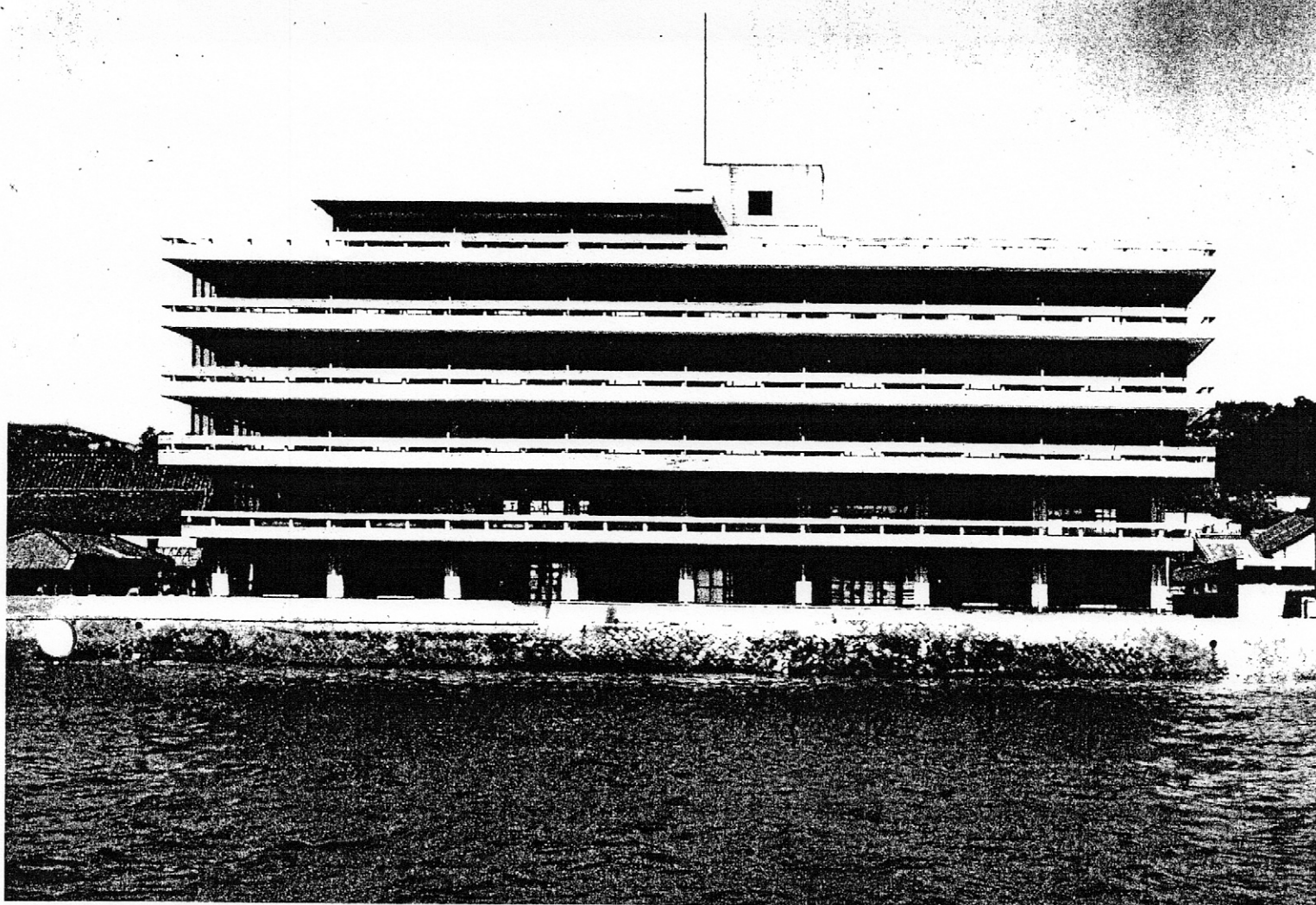
ールであるかということよりも、その導入過程自体に意識を認める。モジュールをもちこみ、創造活動を放恣から律する精神である。それはあくまで自己に対してみずから課したものである。自律の枠での追求こそ秩序を産みえるであろう。

このような意図の追求において、単純化あるいは統一化の過程をとっているいろいろの要素をできうるかぎり省略し、排除し、純粋なもののみを抽出する。この残された数少ない要素はおのおの独立の存在をしめしつつも全体の中に統一される。

われわれは目新しさの奇抜さを追うよりも、時間という厳しい批判にたえ、長く生き残るものをねがっている。

この穏やかな瀬戸内の港町では、新庁舎の建物はきわ高く家なみを越えている。内海からも、あるいはさしせまった山上からも、それは常に市民の目に触れ、新鮮な印象で働きかける。それは常に政の中心であるにとどまらず、なにか精神上の焦点とでもいえるようなものとなる。市民の象徴として、市民のモニュメントとして、いつまでも新しく永遠なるものこそ、われわれ設計者の願ったものである。





south side

南側全景

構造 横尾研究室 岡本建築設計事務所

本館 鉄筋コンクリート造 地上5階 一部6階

カーポート 鉄筋コンクリート造およびPSコンクリート地上1階

軸部 コンクリート打放し ポーレックス吹付け

手摺 現場打ちコンクリート打放し ポーレックス吹付け

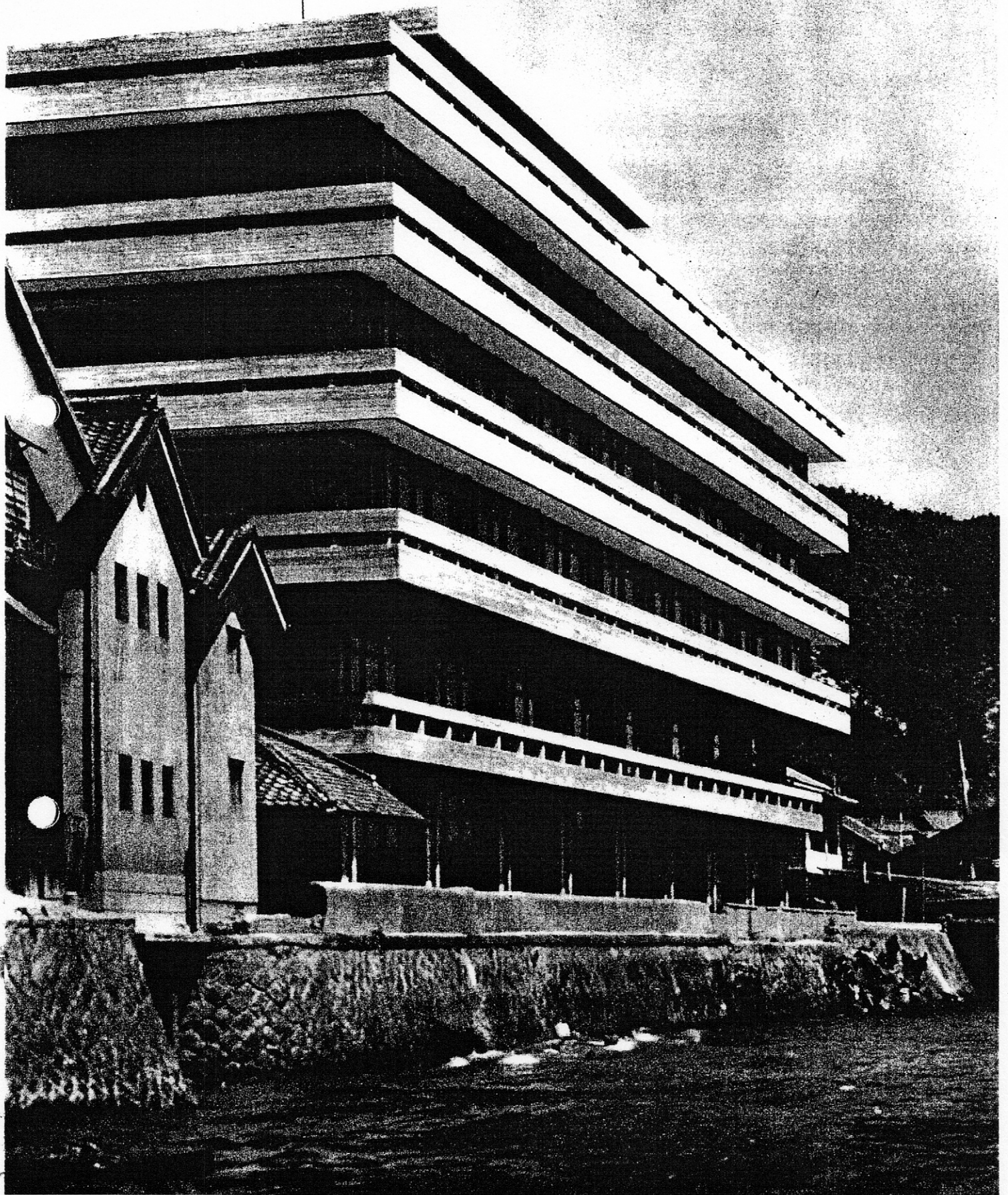
軒裏 1, 2階コンクリート打放し 3, 4, 5階ドロマイトプラスター塗り

大走り 鉄平石方型乱貼り

north side

北側全景





西南よりみる

viewed from southwest

本館建築面積	1,066.684 m ²	床面積	1 階	864.000 m ²	2 階	864.000 m ²	3 階	1,028.160 m ²	4 階	1,028.160 m ²
			5 階	1,028.000 m ²	6 階	206.713 m ²	塔屋	21.735 m ²		
カーポート建築面積	255.000 m ²	工費	153,855,150.00 円							

建築設計 株式会社 〇〇〇〇
 建築監理 株式会社 〇〇〇〇
 建築施工 株式会社 〇〇〇〇

日本の建築がどうあってよいか、その解決に地域性という問題が必然的にかかわってくることもいうまでもない。とはいっても、先日のデザイン会議で L. カーンがいていたが、リアリゼーションとデザインを理解することは正しい。またしかし、これはいうはやすく創るはかたいことも、われわれは百も承知であって、それだけに私は百言よりも一行を重んじたい。最近当地方にも数多くの新建築が生まれた。今私はその一つである尾道市庁舎についての批評を求められたが、逆にいって、私は上述の持論から、批評よりもまず建物を使ってみたい。ただことが最もよいことだと思っているので、私の評など、どうでもよい、本当の蛇足だと思っている。したがってはなはだ恐縮だが、ごく軽い気持ちで読み流していただきたい。またこの批評で建物の真価が変わるわけではなく、むしろ礼を失する点でもあれば、それは私の責で設計者にはなんら関係のないことだご承願したい。

しかし考えてみると、尾道という、中世の地割のままのごとき道沿いにできた家並と、尾道水道と、四囲の和やかな山容の美景に恵まれたこの地には、近代の新建築はなかった。それだけにここに新しく打ち建てようという庁舎はむづかしい極みだともいえる。また事実それは設計者にとってのみならず、今むづかしい時に直面していると、ルドルフも指摘したように、日本にとってもまた最大の難所でもあるので、1, 2 の庁舎やわずかの作品で、それが解決されうるものではまったくないことなのだから、この一つの庁舎に期待をかけすぎること当をえたことではない。それは在来の家屋が木造であるということと、近代建築の不燃性ということ、それは計画上もデザインの面でも、かなり根本的な苦しみに相違ない。それから今一つ、日本の家屋の持つみごとなまでの風情、それは一部の人には郷愁といわれて度外視されることではあるが、それが実は本当に大切なものなのだが、そういうものとの不即不離の問題、そうして輪転の相のうちにこの尾道の将来へのマイルストーンとしての本格的な配置となるというものは、けだし困難そのものといってよいであろう。私も一つの試作をかって削ってみて、その苦しみを体験した一人であるので、今、この新庁舎を見るにつけ無量の喜びを感じる。デザインとはいはやすく行なうはむづかしいものであるということは、くり返し述べても、あまりあるものをつくづく思ったことである。

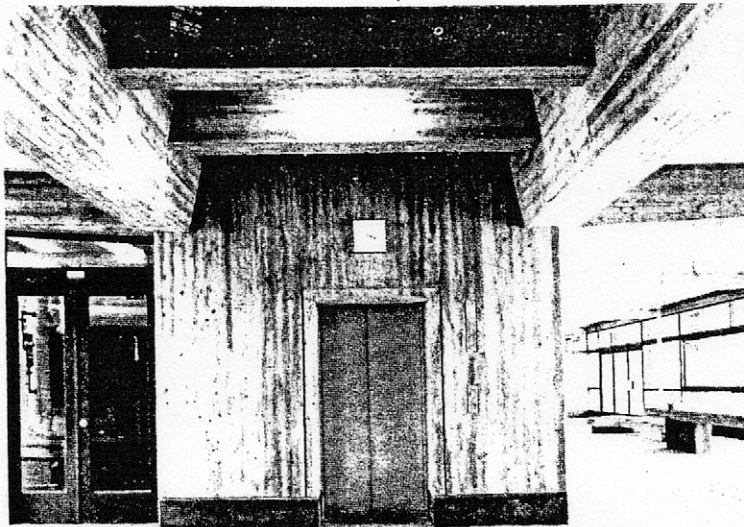
最初増田案は、パブリックアクセスのある2階は、外部よりの直接階段によって昇れる2階外廊下によって、外部と結ばれたものであったそうだが、それが実現案としては1階の市民ホールが直接庁舎の入口となっていた。海にまで抜けたゆとりのある二カ所の入口ホールは、受け付け台やベンチの気のきいた作りのあるロビーで結び合わさ

れ、ここは階段室で2階のパブリックアクセスの事務室に結ばれた。その辺の距離感には市民の心にもゆとりをもたらしように思われて楽しい。2階の事務室はコアシステムの利を生かして、プランにきわめて利便が多いのも、この庁舎のよい特徴であろう。また5階に集められた議会部の中心であり、市庁舎の最重要部である議場もこの庁舎のいちじるしくよい部分ではないかと思う。その形式の新鮮さ、簡潔なうちに日本の感じも健康で明かるく、天井などに少し時流に流れたところはあるとしても、十分に一つのムードをつくりだして、清らかで、雨後の明るさを感じずにはいられない。このように日本らしいムードはこの庁舎の各所に現われているが、それは1, 2階の天井や、3, 4階の間仕切りなどにもよくうかがわれ、木というやわらかみが不思議に程よい取り扱いで、人々に親しさを与えずにはおかないであろう。今は各所にコアシステムの庁舎があるけれども、その多くは日本の味に乏しく、冷やかで暗いのに対し、ちょっとしたことながら、こうも違うものかと思ったことである。市長室もまた同様なものであった。このように先日、私はこの庁舎を訪問し、詳しくその内外の案内を受け、2, 3の方からの使用上の感想も聞くことができた。一方いろいろの家具や、使い方の不揃いも散見した。しかし、現在の多少の矛盾はこの庁舎の真価にとっては大して取るに足らないものであることをさとした。というのは、まだ整備されない敷地内や護岸であるにもかかわらず、土地の狭い尾道ではすでに有閑人がらば車をもってこの市庁舎のベランダに屋下りの休憩に来て休んでいるということを知ったからである。将来この周囲の小広場ができ、都市計画道路が完成されて、市民の場の一部としてのグリーンが庁舎の脇に前庭としてできる頃には、庁舎はもっと市民の心に親しみを深めていく核になっているであろうからであり、今よりもっと私には庁舎の真価が見えてくるものだと思っているからである。

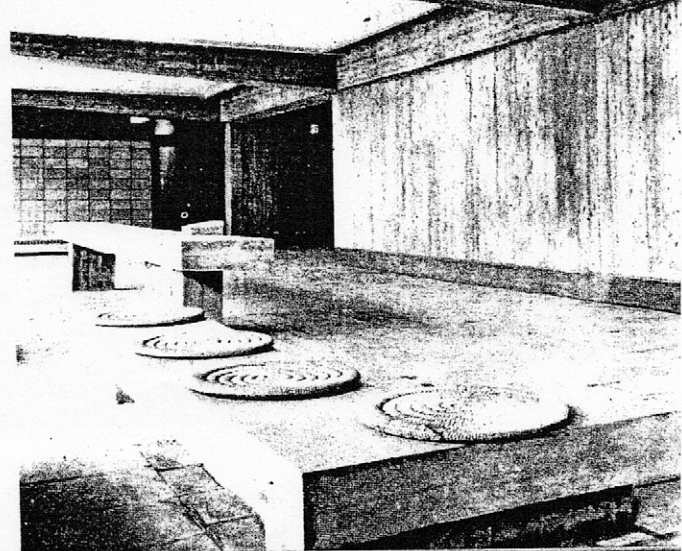
それにしてもこの5層の楼閣は決して華美なものではない。なにかをねらったというところも少ない。じみな外観はこの地方の倉を思わしめて嬉しい。作者は決して薬師寺の東塔をねらったのではなくて、当麻の東塔になったのだと思われ、またそれは決して浄瑠璃寺の塔になるものでもなかった。作者の中の逞ましさは、土蔵の壁でなく、たとえバルコンとガラスの壁であったとしても、この庁舎を強く包んで、ほどよいムードをこの尾道の街に添えた。私はケーブルの車窓に額をよせて見下したのである。西の岬島に対して東の宮のようだと評した人があったそうだが、私はそうは思わない。やはりこの市庁舎はただ素直なこの地方の人々の住居のような気がしてならない。親しさとは、それでよいのではないだろうか。

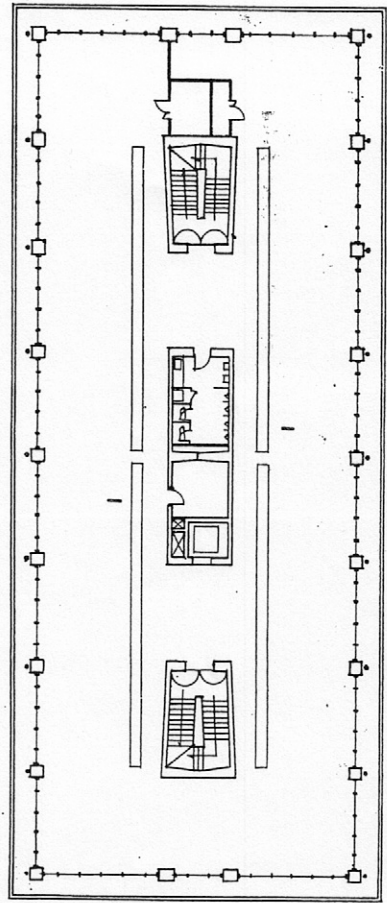
(筆者は広島大学教授)

エレベーターホール

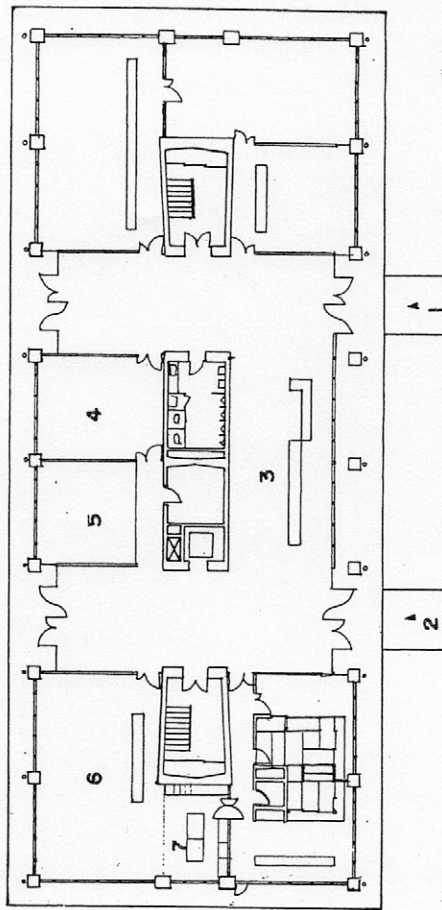


玄関ホール

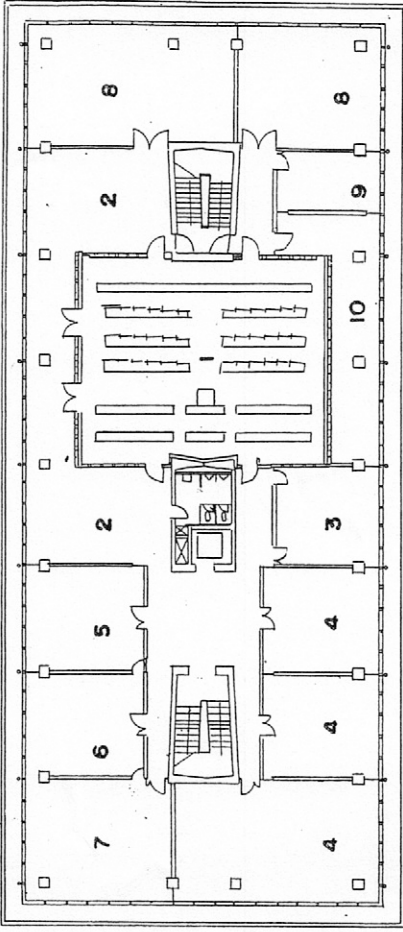




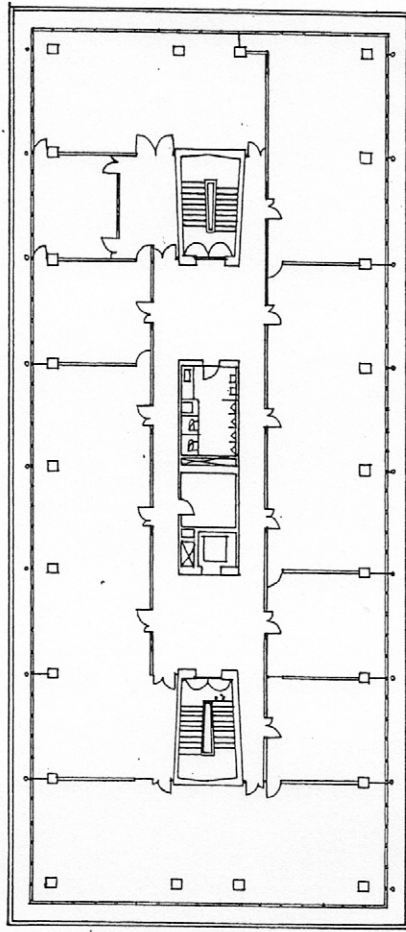
2階平面



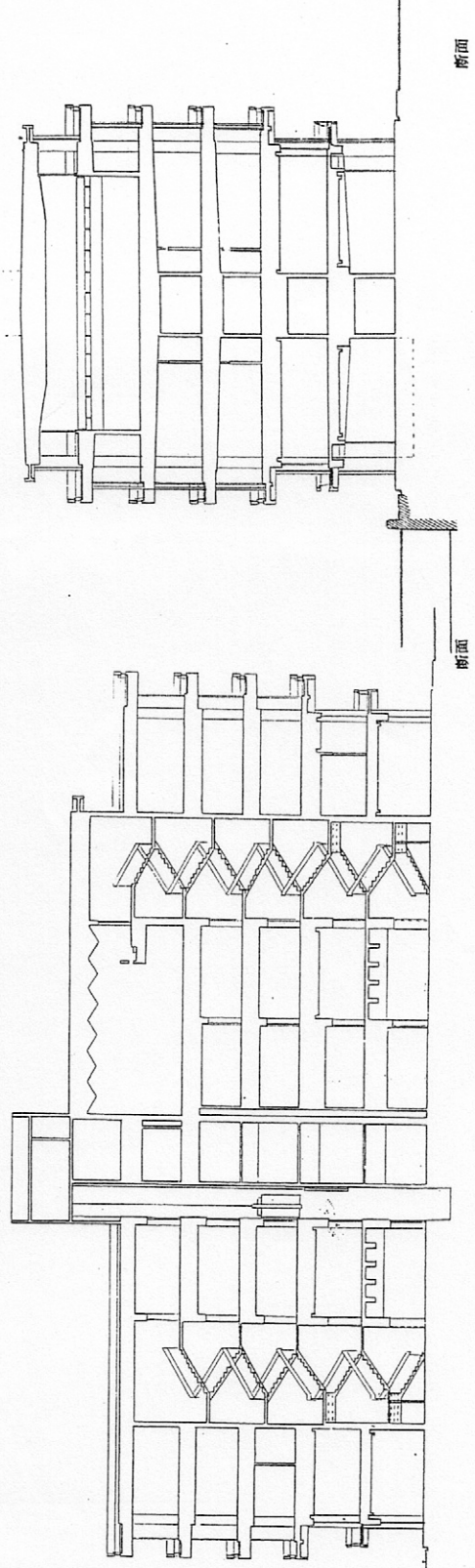
1階平面



5階平面



4階平面

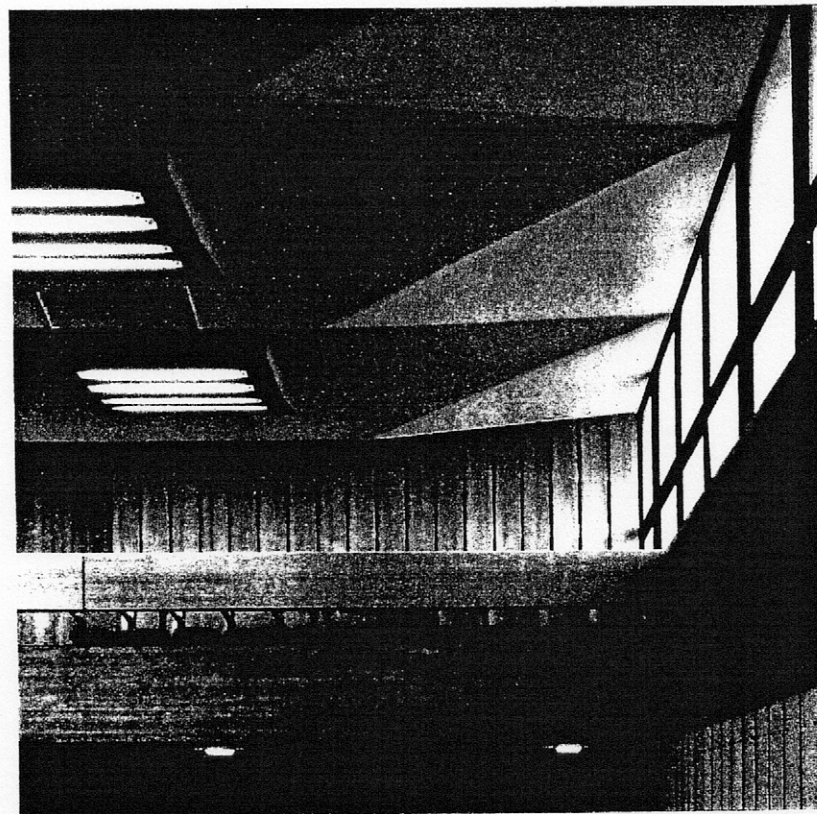


- | | | | | | | | | | | |
|----|--------|----------|-------|--------|---------|-------|---------|--------|---------|----------|
| 5階 | 1 議場 | 2 ロビー | 3 図書室 | 4 議員控室 | 5 議事事務室 | 6 応接室 | 7 正副議長室 | 8 委員会室 | 9 記者室 | 10 電話交換室 |
| 1階 | 1 市民入口 | 2 吏員職員入口 | 3 ホール | 4 電気室 | 5 機械室 | 6 食堂 | 7 厨房 | 2階 | 1 カウンター | |



議場 傍聴席よりみる

傍聴席をみあげる



アラスカ松厚板堅羽目目透し張り化粧釘
 打ちワックス拭き 一部テラカッタイル貼
 り(淡黄土色) 床 アスタイル貼り(青) 机
 ラワン寄木クリヤラッカー塗り 椅子 トー
 ビスケット貼り(銀ネズ) 天井 リゾイド
 かき落し 高窓 スチールサッシュスリガラ
 ス入り 照明器具 米松ソードベニヤ素木
 傍聴席手摺 アラスカ松寄木ワックス拭き
 傍聴席端隠し コンクリート打放し